

## 平安時代和文資料における敬語表現法について

松本光隆

—源氏物語絵巻・元永本古今和歌集を中心に—

はじめに

漢文訓読語の言語的特性を明らかにしようとする時、如何なる場合も、念頭には、他体系の日本語が存在している。例えば、漢文訓読語の助字の訓読法に関する論考は相当の数に昇るものであるが、単に、漢文訓読語内での記述研究であっても、和文語や和歌の言語にはかかる事象が存在しないという意味で、漢文訓読語、または、変体漢文に特有の日本語事象であると言う暗黙の前提がある。即ち、この了解を前提にした場合にのみ、助字の訓読法や用字法の問題は、訓点資料や変体漢文資料内で完結した論述が可能である。

築島裕博士の「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(昭和三十八年三月、東京大学出版会)では、漢文訓読語の語彙の相対化の意図は鮮明で、和文語の語彙との具体的な比較を示されて、漢文訓読語と和文語とに語彙体系の異同があることを浮き彫りにされた。こうした研究においては、漢文訓読語の言語特性を説こうとする時、必ず、他の言語体系の言語実態が念頭にあつて、訓点資料内において完結することはない。

訓点資料における漢文訓読語を論じようとする場合には、右の二種の立場があり得るのであつて、平安時代における漢文訓読語の実態を、如何なる視点で捉えようとするのかによって論述対象資料が異なることは当然の

実態であろう。極端な例を掲げれば、漢文訓読語の特性を、他体系の日本語との比較によつて、質的な差異、または、量的な差異を求める場合には、相対的に比較される言語体系の資料における言語実態の記述が必要である事はここに掲げるまでもないし、漢文訓読語の特性を明らかにしようとする場合、和文語の記述だけの単独論文が存してもよい。漢文訓読語の言語特性の解明を前提に、理論的には、和文語だけを対象資料とした論考があつても良い筈であることはここに断る必要もなからう。

本稿は、漢文訓読語における待遇表現法体系の解明のためには、些か不徹底であつた旧稿<sup>〔1〕</sup>の課題として残した実証的論考を敬語表現を対象に、以下に示してみようとするものである。

本稿は、和文語と漢文訓読語における敬語表現法体系の対照研究である。本稿ではまず、和文語の敬語表現法を取り上げて記述を行いたい。和文の待遇表現法研究(当然、敬語研究をも含む)は、文字研究からの視点も含めて、過去の長きに亙つての研究の積み重ねが存する。今更という感もなきにしもあらずであるが、比較を鮮明に記述するために、まず、以下に稿者によつて和文語における敬語表現法体系を記述することにする。稿者の念頭には、日本語たる漢文訓読語の敬語表現法、曳いては漢文訓読語の待遇表現法体系との比較があつてのことである。

対象とした資料は、十二世紀書写の平仮名和文資料である。一つは、源氏絵巻の詞書についての記述を行う。今一つは、元永本古今和歌集の詞書

及び左注の散文を対象として、和歌、および、長歌は検討対象から除外する。

第一節 源氏絵巻の敬語表現法

— 文法敬語の出現状況 —

まず、平安時代十二世紀の書写とされる源氏絵巻（以下、源氏絵巻と略称）を対象として、敬語表現体系を記述することとする。源氏絵巻は、古典籍索引叢書4<sup>②</sup>に従う。

まず、言語量を問題としておきたい。古典索引叢書の索引を元に、源氏絵巻の言語量を示そうとするものであるが、言わずもがなのことながら、索引自体の編纂方針によって単語数は出入りがあるから、概数として目安を掲げるものであることを断つておく。古典索引叢書4に掲げられた単語数は、自立語・付属語を合わせて、延べ五、四二三語が存する。言語量としては、この五、四二三語によって綴られた和文を対象にして以下に記述するものであることを最初に確認しておく。

最初に、敬語表現について記述する。敬語表現についても、補助動詞・助動詞・接辞（接辞）は厳密には、語彙敬語と位置づけるべきである等の種々の問題があるが、本稿では接辞も今、仮に文法的敬語表現中にカテゴライズして記述しておく）についての計量的な整理を行う。一般の平安和文において認められる敬語表現であるが、これらの語の使用による敬語表現は、文法的敬語表現と規定されるものであつて、かかる要素が頻出する。<sup>③</sup>

補助動詞の使用では、

1、「けふのせきむかへは、えおもひすてたまはしな」とのたまふ。

（関屋16）

2、「このよのそしりをば、しらでなむかくものしはべる」などきこえたまふ。御かたりことにて、ものなまめかしうなつかしきさまにうちしのびやつれたまひて、うるはしきすみぞめの御すがたのあらまほしくきよらなるもうらやましくみたてまつりたまふ。

（柏木一5〜12）  
など、文法的に、動詞に下接して尊敬の補助動詞として機能する「たまふ」が、文末または句末に顕著に認められる。

○たまふ（四段） 一三五例（総語彙量中 4.25%）（一三、一四五例 3.49%）  
3、「このおはしまさましかば」とおもうふたまへらるゝことおほく、  
（竹河二36）

など、動詞に下接する下二段、謙讓の補助動詞は、  
○たまふ（下二段） 五例（総語彙量中 0.09%）（三二一例 0.09%）  
謙讓補助動詞「たてまつる」は、例2などに認められ、  
○たてまつる（四段） 一七例（総語彙量中 0.31%）（一、二八五例 0.34%）

（源氏物語中には右の四段補助動詞他に、下二段補助動詞一例が存する）

が出現する。  
謙讓補助動詞「きこゆ」は、  
4、まちよろこびきこえさせたまふ（鈴虫二44）  
などと現れて、

○きこゆ 一三例（総語彙量中 0.24%）（一、三八四例 0.37%）  
補助動詞「はべり」は、謙讓・丁寧の用法で現れ、  
5、「きゝいれはべらぬなり」ときこえたまふ（柏木一49）  
はべり 二二例（総語彙量中 0.38%）（一、九〇四例 0.50%）

また、源氏絵巻中には、補助動詞による文法的敬語表現が存する。  
6、「わざとかくたちよらせたまへること」といはずれば（若紫断3）  
などの使役・尊敬の補助動詞「す・「さす」が存し、補助動詞「す」は、

○す 一八例（総語彙量中 0.33%）（一、九三九例 0.51%）  
補助動詞「さす」は、

○さす 一六例（総語彙量中 0.29%）（一、〇一六例 0.27%）  
の使用例が認められる。源氏絵巻における補助動詞「る・「らる」の総数は、

○る 一三例（総語彙量中 0.24%）（一、五三〇例 0.41%）

尊敬用法の存する活用形である連用形の総数は、「る 六例」、

〇らる 一四例 (総語彙量中 0.26%) (六四八例 0.17%)

また、助動詞「らる」は、連用形の例「らる 九例」である。

接頭辞「お」「おほむ」「ご」「み」(御)を付した語が認められる。厳密には、接頭辞が付されて一語となるため、語彙的敬語とみとめるべきであろうと思われるが、使用した古典索引叢書4には、左掲の如き語例が存する。

お おほむし・三例<sup>(心)</sup>、「おまへ・七例」〈異なり二語〉

おほむ 「おほむあそび・二例」、「おほむありき・一例」、「おほむありさま・四例」、「おほむありきまども・一例」、「おほむいらへ・一例」、「おほむか・一例」、「おほむかき・一例」、「おほむかたさま・一例」、「おほむかたち・五例」、「おほむかたちども・一例」、「おほむかへり・一例」、「おほむぐし・二例」、「おほむくどく・一例」、「おほむくるま・三例」、「おほむけしき・三例」、「おほむこ・一例」、「おほむこがたき・一例」、「おほむこち・三例」、「おほむころ・六例」、「おほむころぎし・二例」、「おほむころども・一例」、「おほむころならひ・一例」、「おほむこと・二例」、「おほむさうし・一例」、「おほむさうぞく・一例」、「おほむさかり・一例」、「おほむさき・一例」、「おほむさま・三例」、「おほむしつらひ・一例」、「おほむしとね・一例」、「おほむしのびありき・一例」、「おほむすかた・二例」、「おほむすくせすくせ・一例」、「おほむせうそく・二例」、「おほむぞ・一例」、「おほむため・一例」、「おほむち・一例」、「おほむつかひ・二例」、「おほむつきめで・一例」、「おほむて・一例」、「おほむとし・一例」、「おほむどち・一例」、「おほむなか・一例」、「おほむにき・一例」、「おほむねんすたう・一例」、「おほむはな・一例」、「おほむふみ・一例」、「おほむまじり・一例」、「おほむまゐり・一例」、「おほむみ・一

例」、「おほむみみ<sup>(耳)</sup>・一例」、「おほむむね<sup>(鼻)</sup>・一例」、「おほむめ<sup>(目)</sup>・一例」、「おほむものけ<sup>(物)</sup>・一例」、「おほむよろこび<sup>(喜)</sup>・二例」

〈異なり五五語〉

ご 「ごかじ<sup>(加)</sup>・一例」、「ごぐわん<sup>(冠)</sup>・一例」、「ごぜん<sup>(前)</sup>・二例」

〈異なり三語〉

み 「みかど<sup>(門)</sup>・二例」、「みぎちやう<sup>(几帳)</sup>・三例」、「みくるま<sup>(車)</sup>・一例」、「みこたち<sup>(子)</sup>・一例」、「みずきやう<sup>(前)</sup>・一例」、「みす<sup>(簾)</sup>・二例」、「みちやう<sup>(帳)</sup>・一例」、「みづしども<sup>(厨)</sup>・一例」、「みともびと<sup>(供)</sup>・一例」、「みのり<sup>(法)</sup>・一例」、「みはし<sup>(庭)</sup>・一例」

〈異なり一一語〉

の例が認められ、接頭語「お」「おほむ」「ご」「み」による敬語表現は規則的に現れて盛んに名詞に冠せられて出現する。

### 第二節 源氏絵巻の敬語表現法における複合動詞

源氏絵巻の中には、厳密には、語彙敬語に分類すべきであろうと判断される以下の如き複合動詞があらわれる。例えば、

7、うちあたりなどまかりありきて(竹河二35)

として、複合動詞「まかりありく(罷歩)」が一例出現する。「まかる」の上接した複合動詞「まかる十ー」は、現存の源氏絵巻には、この一例のみであるが、源氏物語自体には、

- まかりあかる まかりあたる まかりありく
- まかりいづ まかりいる まかりうす
- まかりうつる まかりおりあへず まかりおる
- まかりかへる まかりかよふ まかりくだる
- まかりすぐ まかりたゆ まかりづ
- まかりつく まかりとまる まかりなる
- まかりにぐ まかりのぼる まかりはなる
- まかりまうす まかりむかふ まかりよる

まかりわたる

〈異なり二五語形〉

と、複合名詞の「まかりまうし」一語形が存して、それぞれ謙讓語として用いられている。「まかる」によって盛んに造語され、接頭語的に文法化していると思える余地がある。また、源氏絵巻には出現しないが、源氏物語には、以下のよう

おとりまかる

とりもてまかる

もてまかる

複合動詞後部要素としても現れる場合も同様である。

補助動詞として形式的規則的に使用される語と、助動詞、また、文法敬語を広く解釈して、規則的に造語されるものを含めて右に記述したが、源氏絵巻言葉書（および、源氏物語）においては、かかる敬語表現が盛んに用いられていると認めることが出来る。

なお、源氏絵巻中に存在する文法敬語の出現率は、源氏物語本体に使用される出現率と大きくは離れていないことが注目される。

### 第三節 源氏絵巻の敬語表現法

— 語彙敬語の出現状況 —

一方、源氏物語詞書の中には、語彙敬語<sup>⑨</sup>としては、次のようなものが現れる。動詞「おはす」「おはします」は、尊敬動詞として出現する。

7、とおはせましかば、ゆくすゑの御すくせ<sup>⑩</sup>は（竹河一12）

○おはす 一四例（総語彙量中0.25%）〈六六〇例<sup>⑪</sup>0.18%〉

8、そのひと十八九ほどやおはしましけん（竹河二5）

○おはします 九例（総語彙量中0.17%）〈四三〇例<sup>⑫</sup>0.11%〉

「おはす」「おはします」は、複合動詞を多く作り出す。源氏絵巻中には、複合動詞前部要素としての語が出現しないが、「おはす+」は源氏物語には、「おはしあつまる」「おはしあふ」「おはしかよふ」など、一二語形が出現する。複合動詞後部要素としては、源氏物語に「あそびおはす」「あゆみおはす」「いそぎおはす」など、四二語形が認められる。また、「おはしま

す」も、複合動詞前部要素としては、「おはしまさせそむ」「おはしましかよふ」など九語形が、複合動詞後部要素としては、「あはればおはします」「いでおはします」など二四語形が出現して盛んに造語されているが、後部要素として存在する場合には、補助動詞化したと見る余地がある。

「おぼす」は、源氏絵巻中には、単独語形で一二例の出現がみとめられる語彙敬語で、複合語としては、源氏物語中に、複合語前部要素として「おぼしあかす」「おぼしあがむ」など一五八語形、後部要素としては「あいおぼす」「うしろみおぼす」など一六語形が出現する。「おぼしめす」は、源氏絵巻中には単独一例が認められるが、源氏物語中には、複合動詞前部要素として一〇語形、後部要素としては「おぢおぼしめす」「をしみおぼしめす」の二語形が認められる。

「おほす(仰)」は、源氏絵巻中一例の使用例が認められるが、源氏物語には、複合動詞形として「おほせおく」「おほせつかはす」と「いましめおほす」「おきておほす」「もよほしおほす」が出現する。

尊敬動詞「きこしめす」は、源氏絵巻中に一例（鈴虫二7）出現する。複合語形は源氏絵巻中には認められないが、源氏物語には、前部要素に現れる複合動詞「きこしめしあきらむ」など、一九語形が存し、後部要素に立つ「つたへきこしめす」一語形が存する。

「たまふ」は源氏絵巻には二例の出現が認められる。源氏物語には、「たまふ」は、複合動詞上接要素としてはあらわれないようで、形式化が進んで補助動詞として認定されるのが普通であろうが、動詞に後接する形は多い。

「のたまはす」は、源氏絵巻には二例が現れる。複合動詞は、源氏物語には出現しない。

「のたまふ」は源氏絵巻には、一二例の出現がある。源氏絵巻には、「のたまひいづ」と「おぼしのたまふ」が出現する。源氏物語には、複合動詞は多出して、「のたまひあかす」など上接要素としてあらわれるものは、

四三語形が認められる。後部要素としては「うちのたまふ」など一一語形。その他「うちのたまひいづ」「うちのたまひまぎらはす」の二語が出現する。

源氏絵巻中には、単純語としての「めす」は出現しないが、連用形の転成名詞「めし」が存する。複合動詞は存して、「めしいづ」「めしよす」が各二例存する。源氏物語においては、複合動詞の生成例があつて、前部要素として現れる複合動詞は一二語形が存する。

右の諸例が、尊敬動詞として出現し、複合動詞を生成する。謙讓動詞は、以下のものが認められる。

「きこゆ」は、第二節に謙讓補助動詞として文法化したものと扱ったが、単独での謙讓動詞が二七例出現する。源氏絵巻には、複合動詞「きこえかはず」が二例出現している。源氏物語には、前部要素に立つ複合動詞が存して「きこえあかす」「きこえあきらむ」など八一語形が存して、複合動詞の造語が栄えている。

「さぶらふ」は、源氏絵巻には動詞として四例が存する。源氏物語には、複合語形が存して、「さぶらひあふ」「さぶらひくらす」「さぶらひなる」「さぶらひよる」と、「まゐりさぶらふ」とが存する。

動詞「たてまつる」は、源氏絵巻には三例が出現する。源氏物語には、複合動詞前部要素として六語形があらわれ、「たてまつりうつる」「たてまつりおく」「たてまつりかふ」「たてまつりくはふ」「たてまつりそふ」「たてまつりなほす」が現れる。

「たまはる」は源氏絵巻には、二語が出現する。源氏物語には、「まうしたまはる」の複合動詞が出現する。

動詞「はべり」は、源氏絵巻には一七例出現する。源氏物語には複合動詞の前部要素としては出現がなく、補助動詞と認定される形が存する。<sup>1)</sup>

「まうす」は源氏絵巻には二例が存して、「申たまふ」の連接として出現する。「まうすは、源氏物語においては、複合動詞前部要素として「もうしあきらむ」など一一語形、後部要素としては「いのりまうす」など一九語

形が出現する。「ます」の語形では、源氏絵巻に二例存しているが、源氏物語中では複合動詞を作らないようである。

「まうづ」は、連用形の二例が存して「まうでたまふ」の連接で現れる。複合動詞としては、源氏物語に「まうであふ」など前部要素として七語形、「とぶらひまうづ」「わたりまうづ」と「いでまうでく」「つたはりまうでく」「ゐてまうでく」が出現する。

動詞「まゐる」は、源氏絵巻には、一五例の出現を数え、源氏絵巻中にも「かへりまゐる」「もてまゐる」「まゐりなる」などが出現するが、源氏物語中の前部要素としての複合動詞は、二六語形が出現する。後部要素としては「あつまりまゐる」など二〇語形の出現がある。

右の他に、漢語出自のサ変動詞が存する。源氏絵巻には、「御覧ず」二例が認められる。

右の記述が些か平板になつた嫌いがあるし、既に多く記述されてきたものであると判断されるが、漢文訓読語との対照のために、煩を厭わず記述を行った。源氏絵巻・源氏物語の記述のみであるが、単純語として出現する敬語動詞は、一方で、複合動詞を生成する造語力を持っていた事が判ろう。本稿に、文法的な敬語表現としてカテゴリー化して取り上げた補助動詞は、文法的形式化が進んだものとして認定されたの特立である。

形式化が進んで補助動詞として成立しているか、複合動詞の後部要素として動詞の原義を強く保持しているかの判断は、実は、研究者の主観が入り込んでいることを認めなければなるまい。複合動詞の分析自体も、客観化を目指しての記述が行われてきているが、やはり、主観性の「濼」は完全には排除されてはいないと評価すべきであろうと思われる。即ち、蓋然性の問題が未だ大きな部分を占めていると認めるべきではなからうか。結論を急げば、敬語単純動詞が、複合動詞後部要素として現れる力を得る場合、複合して新たな意味を表現する複合一語が和文の表現性の必要性を支えていくのであろう。しかし、実は「単純語+単純語」で成立した複合動詞数

直線の連続した端に、後部要素が形式化を果たした「動詞＋補助動詞」の存在があると思えることができるのではなからうか。即ち、複合語生成の力をもったこと自体が和文語の敬語表現の自由度の特色があると認めることが出来よう。各研究者の持つ「澱」とは、複合動詞要素文法化の数直線上のどこからが形式化した補助動詞であると認めるのかの「揺れ」の問題であると置き換えても良からう。

複合動詞の前部要素として出現する敬語動詞も、実は、接頭語的に形式化する力を持っていると見ることができるとはあるまいか。本稿の源氏繪巻の分析には、接頭語語形としては、名詞が出現するのみで、この接頭語を含む名詞から、直接的に複合動詞に結び付けるには飛躍があると自覚するが、複合動詞も「単純語＋単純語」から、前部要素が次第に形式化していけば、接頭語的なものとなっていくことになる。

後に触れる漢文訓読語の敬語表現と和文語の敬語表現との違いは、源氏繪巻・源氏物語の和文敬語動詞において、漢文訓読語に比較して、複合動詞の造語に自由度が高いことと、次第に形式化の力が働いて、文法化する可能性を秘めた存在であったと認めることが出来るのではなからうか。

#### 第四節 元永本古今和歌集詞書・左注の敬語表現法体系 — 文法敬語の出現状況 —

東京国立博物館蔵元永本古今和歌集（以下、元永本と略称する）は、上帖、巻第十末に「元永三年（一一二〇）七月廿四日□□と有ることによって、元永三年頃の書写と認められる古今和歌集の完本である。源氏物語の成立と比べれば、約一〇〇年ほど早くに成立した言語資料で、文章が断片的であるが、この資料中の序文と和歌・長歌を除外した散文部分、即ち、詞書と左注とを対象として、敬語表現体系を記述してみる。ただし、第一節・第二節の如くには詳述せず、概述することを旨とする。なお、集計は、古典籍索引叢書<sup>(1)</sup>2に従う。

元永本の詞書・左注の言語量は、総語数七、二四八語であるが、これには、七二八首に互って記された「在原元方」などの作者名・「よみびとしらず」・「同人」などの語を含んだものである。

まず、敬語表現を計数化して示すこととする。尊敬の補助動詞「たまふ（四段）」の使用は、序と歌とを除いて、

9、日はてりながらゆきのかしらにかゝりけるをよませたまうける

文屋康秀（一八右）

などと詞書に現れるが、全二〇語の出現で、多出はしない。

○たまふ（四段） 二〇例（総語彙量中0.28%）

補助動詞「たてまつる」は、四段・下二段ともに出現しない。「きこゆ」も、本動詞の用例は存するが、補助動詞としては出現しない。文法敬語も、右の諸語は、古今和歌集詞書・左注には出現比率が極めて低いことになる。その中であって、補助動詞「はべり」は、

10、さける花のちりがたになりけるをみてよみはべりける 典侍因香

（二八右）

の如く現れて、二九例（内に「はうべり」一例を含む）が出現している。

○はべり 二九例（総語彙量中0.40%）

文法敬語における補助動詞の出現は、源氏物語の出現率に比較して低い値を示す。ただ、右の「はべり」の比率は、源氏物語繪巻に近い。

この補助動詞の出現の指数が何に由来するのかは、慎重に検討する必要があつて、要素としては種々の可能性が存するのであつて、今後の課題とせざるを得ないが、和文関係の平安時代の写本が現存稀であることが憾みとして残る。

使役尊敬の助動詞は、「す」「さす」が現れる。「す」は、詞書・左注には一二例が出現する。歌中には、五例の出現がある。「さす」は、三例が詞書に現れて、歌中には出現しない。

○す 一二例（総語彙量中0.17%）

源氏物語絵巻と比較して、やはり、出現率が低い。「さす」も、

○さす 三例(総語彙量中0.04%)

とあって、出現率が低い。元永本古今集には助動詞「しむ」が一例出現するが、序文である。

助動詞「る」は、受身、自発、可能の用法として存する<sup>(13)</sup>ようで、助動詞「る」の出現は、

11、哥読とおほせられける時に (161詞書)

など、五例の出現がある。

接頭辞による敬語表現は、

お お前(おまへ)・四例 〈異なり一語〉

おほむ 御五十(おほむいそぢ)・一例、「おほむうつくしみ・一例」、「御

賀(おほむが)・一例」、「おほむかた<sup>(方)</sup>・一例」、「おほむ返事(か

へりごと)・一例」、「あまてるおほむ神(かみ)・一例」、「御國忌(お

ほむこき)・一例」、「御(おほむ)つゑ<sup>(杖)</sup>・一例」、「御時(おほむ

とき)・一九例」、「寛平御時(くわんぷやうのおほむとき)・

三三例」、「御(おほむ)とも<sup>(供)</sup>・二例」、「御服(おほむぶく)・一

例」、「御(おほむ)みき<sup>(酒)</sup>・三例」、「御(おほむ)め<sup>(目)</sup>・一例」、「御

(おほむ)もの<sup>(物語)</sup>かたり<sup>(語)</sup>・一例 〈異なり一五語〉

おほみ 御遊(おほみあそび)・一例、「御歌(おほみうた)・五例

〈異なり二語〉

ご 御(おほむ)す<sup>(覧)</sup>・五例 〈異なり一語〉

み 帝(みかど)・一八例、「みかは水<sup>(御清)</sup>・一例」、「みこ<sup>(國王)</sup>・四七例、

「みたらしかは<sup>(御手洗川)</sup>・一例」、「みやすと<sup>(御息所)</sup>ころ<sup>(所)</sup>・七例、「御山(みやま)・

一例 〈異なり六語〉

の如きものが出現する。和歌においてもこれらの接頭語が語構成要素となつて、その出現は多くはない。ただし、漢文訓読語資料におけるこうした接頭語の付された敬語

名詞の出現が極めて限られたものであることに比すれば、和文の特徴的な事象であることは揺るがないものと認められる。

第五節 元永本古今和歌集詞書・左注の敬語表現法における複合動詞

元永本古今和歌集の詞書・左注に認められる敬語表現に与る複合動詞には、

12、惟喬親王のもとにまかりかよひけるを、かしらおろして、おのとい

ふところにこもり侍りけるに、正月にとぶらはむとてまかりて侍り

けるに、ひえの山のもとなりければ、雪いとたかゝりけり。しみて

かのむろにまかりいたりて、をかみけるに。つれ／＼として、いと

ものかなしうてかへりまうできてよみておくりける (970詞書)

の如くの例が存して、「まかりかよふ」、「まかりいたる」や「かへりまうでく」は、敬語表現に与る複合動詞であると認められる。「まかる」は、

13、思に侍りける年の秋、山寺にまかりけるにちにて読める (842詞書)

の如く、語彙敬語として単独でも使用されるが、複合動詞前部要素として、

まかりありく まかりあるく まかりいたる

まかりいづ まかりかよふ まかりとぶらふ

まかりのぼる まかりまうす まかりわたる

〈異なり九語形〉

の造語を成し、後部要素としては、

かへりまかる

の一語形を造語する。源氏物語絵巻ほどには造語する複合動詞の異なりは

大きくはないが、敬語表現に与る複合動詞前部要素としての造語力を有す

る。

「まうづ」も、単独に語彙敬語としての使用があつて、

14、いし山にまうづけるととき、おとはやまのもみちをみて づらゆき

(256詞書)

語彙敬語として敬語表現に与るが、複合動詞の要素として、

かへりまうでく こえまうでく

まうでく

などの造語をなしている。

先学によって示された索引<sup>(14)</sup>によって、平安時代の複合動詞の俯瞰をすれば、「まかる」は、前部要素として五二語形、後部要素としては一九語形を作り出しているし、「まうづ(詣)」は、前部要素として一九語形、後部要素として二九語形、「まづ(詣)」が前部要素として三語形を作り出しているから、平安時代を通じて、複合語の造語力のあつた語であると認めることが出来るのではなからうか。

右の複合動詞は、厳密には語彙敬語に属するとしてカテゴライズする必要があろうが、敬語表現に与る本動詞に、接頭語的、また補助動詞的に敬語複合動詞を造語していく活力があつたと認めるべきで、規則的に敬語複合動詞を作り出す、謂わば、文法敬語的側面を認めることが出来るのではなからうか。

#### 第六節 元永本古今和歌集詞書・左注の敬語表現法体系

##### — 語彙敬語の出現状況 —

元永本古今和歌集詞書・左注についても語彙敬語としては、敬語表現に与る本動詞を指摘できるであろう。本動詞については、「おはす」二例、「おはします」一一例の出現があるが、複合動詞の要素としては現れてはいない。「おほす」は詞書に一例認められる。この「おほす」は、敬語複合名詞「おほせごと」三例を作っている。「おほらふ」は五例の出現があつて、連用形転成名詞「さぶらひ」三例が存在する。

「たうぶ」は五例、「たぶ(四段)」は一例、「たぶ(下二段)」が一例存するが、複合語形は作っていない。

動詞「たてまつる(四段)」は、全二一例が存する。

15、御ものがたりのついでによみてたてまつりける／僧正遍昭(247詞書)などで、動詞「たてまつる(下二段)」は一例が認められて、

16、御みきのおろしきこえにたてまつれたりければ、くらひとどもわら

ひて、(874詞書)

との出現が確認されるが、補助動詞として動詞に後接しては使われてはいない。

「たまはす」は一例、「たまはる」は三例が出現する。

本動詞「たまふ(四段)」は、

17、仁和帝のみこにおはしましけるときに、ひとにわかなたまひける哥

(21詞書)

を初め、三例が確認される。「たまふ(四段)」は、補助動詞としても出現することは、第四節に記述した如くである。

「つかまつる」は左注に一例、「つかうまつる」は四例出現して、「つこうまつる」は「なれつかうまつる」の複合動詞を作っている。

「のたうぶ」が一例出現する。

「はべる」は本動詞として三五例が出現する。補助動詞としての出現は先に述べた通りである。

単純語形の本動詞「まうづ」は七例が出現する。複合動詞を作ることには、先に触れた。

「まかる」は六四例が出現して、また、複合動詞も造語する。

本動詞としての「ます(申)」は一例、「まうす」は七例の出現があつて、補助動詞としても使用される。

「まるる」の使用例は二例で、複合動詞としての出現はない。

以上が、元永本古今和歌集の詞書・左注における語彙敬語としての本動詞の出現例であるが、源氏物語絵巻に比較して、複合語に向かつての造語が活発ではないと認めることが出来ようか。また、補助動詞としての使用も、

然程には目立たないと評価できそうである。

おわりに

極めて概括的な俯瞰でしかないが、源氏物語絵巻と元永本古今和歌集詞書・左注の敬語表現の記述を試みた。念頭には、勿論、漢文訓読語資料における敬語表現の有り様が存するが、平安時代の漢文訓読語における敬語表現法は、語彙敬語に偏る表現を採ると思われる<sup>(15)</sup>。複合動詞の出現も、基本的には原漢文の用字に左右されるし、読添語として反映されても良きような補助動詞も計量的には多くが出現しない。また、助動詞による敬語表現も極めて少ない。即ち、文法化して機能する文法的要素による敬語表現が盛んではない。待遇表現のレベルに範疇を拡げても、やはり、語彙的待遇表現が主体である。

これに比較して、本稿に採り上げた二種の和文の敬語表現は、まず、補助動詞、助動詞による文法敬語表現が盛んである。また、厳密には語彙敬語にカテゴライズすべきであろうと判断される接頭辞による敬語名詞・敬語動詞や敬語表現に与る複合動詞が盛んに用いられる。語彙敬語の範疇ながら、接辞による敬語名詞・敬語動詞は、接辞自体の種類が然程には多くはなく、規則的に造語される。即ち、文法的色彩を備えた造語であると評価できる。敬語表現に与る複合動詞も、敬語本動詞形からの複合動詞の造語力が盛んであると評価できるものであつて、敬語機能に特化して補助動詞化して文法敬語の範疇に納められる補助動詞の生成も、本来は、複合動詞の生産力が盛んな条件下において、複合動詞から動詞+補助動詞へ連続的に進化するものであろうから、複合動詞の造語が盛んであること自体が、文法化する方向に傾斜するような力学の元に動いている問題だと判断される。

こうした和文の動向にあつて、源氏物語絵巻と元永本古今和歌集詞書・左注の二和文資料を比較すると、源氏物語絵巻よりも、元永本古今和歌集

詞書・左注における敬語表現法は、漢文訓読語の敬語表現法体系により近いと認められる。本稿の検討では、計量的な問題であつて、質的には明確に論じ難いという憾みを残すが、かかる傾向が、平安時代和文の通時的な問題なのか、和文内での文体差の問題であるのかは、今後の課題とせざるを得ない。

注

- 1、拙稿「高山寺蔵不空三藏表制集院政期点について―上表と勅答の訓読語における待遇表現法を中心に―」(高山寺典籍文書総合調査団平成二十三年度研究報告論集、平成二十四年三月)。
- 2、田島毓堂編『源氏物語絵巻詞書総索引』(『古典籍索引叢書4』、平成六年三月、汲古書院)。
- 3、漢文訓読語と比較して、和文において文法的敬語表現の多出現象の一端は、注1拙論において指摘した。
- 4、へ〜中に示した用例数は、源氏物語中の各該当語の延べ使用例数である。また、百分率は、参考に掲げたもので、  
上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・藤田真理・上田裕一『源氏物語<sup>附録</sup>総索引』付属語篇別冊(平成八年二月、勉誠社)  
の情報、総語数・三七六、〇五四語(因みに、自立語数・二二三、〇九六語、付属語数・一六二、九五八語)を元に算出した百分率・%である。第一節においては以下同じ。
- 5、源氏物語の助動詞「す」・「さす」および「る」・「らる」の用例数は、注4文献による。  
なお、源氏物語には、同文献には助動詞「しむ」の三例が掲出されている。
- 6、当代「まし」が単独では存在しない。規則的に接頭語「お」が付かない対立語形が求められないので、純粹には語彙的な敬語と扱うべきであろうが、語構成の点から他の接頭語付きの語と同じく、今ここに、便宜上掲げておく。
- 7、「ぜん」も注6と同様に扱う。
- 8、東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明『平安時代複合動詞索引』(平成十五

年四月、清文堂出版)を参照した。

9、本稿における語彙敬語は、類義語彙体系中に、待遇表現価値を伴って、他の類義語とは別語形を取るものを指している。動詞「おはす」「おはします」は、

○その人にもあらずなりはべりにたいりや(柏木二25)

○よりかかりてみたまへるを(御法25)

などの動詞「あり」「をり」と類義語体系を作って使用されているが、尊敬の待遇表現価値を担っている。また、逆に、動詞「はべり」は、謙讓の待遇表現価値を担って類義語体系中に存在している。これらの尊敬動詞「おわす」「おはします」や謙讓動詞「はべり」を語彙敬語と称する。

本稿では、文法敬語は、補助動詞や助動詞など、動詞に下接して敬語待遇表現を添える形式についての称としたが、「おほむあそび」↓「あそび」など、厳密には相互に一語の語形対立で、語彙敬語とカテゴライズすべき要素である接頭語や、複合動詞の前部要素などについても、規則的な造語が行われるものと認定して、文法敬語のカテゴリーに分類している。

10、用例数の内、四段活用の一例を含む。

11、注8文献には、「もてはべり」一語を複合動詞として認定しているが、「はべり」の形式化が進んでいないとの判断であろう。

12、築島裕・石川洋子・小倉正一・土井光祐・徳永良次編『東洋館本古今和歌集総索引』(古典籍索引叢書2)、平成六年九月、汲古書院)。

13、注12文献の分類による。

14、注8文献。

15、注1文献。

(平成二十四年八月二十日・脱稿)